



アドベンチャーツーリズム —北海道が開く世界への扉—



(一社) 北海道開発技術センター調査研究部
研究員 佐賀 彩美

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリイ国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。



不思議の森スキーシュエ（2019年3月1日）

はじめに

北海道及び政府は、5月23日、正式にATTA（アドベンチャー・トラベル・トレード・アソシエーション）会長シャノン・ストーウェル氏に、世界大会ATWS（アドベンチャー・トラベル・ワールドサミット）の2021年北海道開催を招請しました。それに先立ち、2月末から3月上旬にかけて、経済産業省、JTB総合研究所、ATTAの主催、国土交通省北海道運輸局、北海道、（公社）北海道観光振興機構の協力により、アドベンチャーツーリズム（以下AT）振興を目的とするアドベンチャーウィーク（以下AW）というイベントが本道で開催されました。ATTAはAT関係の各国の旅行社、観光協会、メディアなど1,300以上の法人、個人会員で構成され、ATを牽引している世界最大の団体です。AWはATの旅行先として有望な場所を紹介するプログラムの1つで、ATTAメンバーの旅行社、メディアを招待しFAMトリップ（視察旅行）や商談会を行います。今回のAWには欧米豪から、旅行社代表12名、メディア関係者6名が来道、1週間のFAMトリップ及び札幌で行われた商談会に参加しました。

ATとは、自然、異文化、アクティビティ（自然体験、野外活動・スポーツ等）の3要件のうち2つ以上を含む旅行形態です。ATが注目される理由は、まず、世界のアウトバウンド市場全体の約60%を占める欧米圏でのシェアが約40%と大きく¹⁾、最新の調査報告²⁾に

は2016年に4,448億8,500万ドル（約50兆円）だったAT市場の価値は、2023年には1兆3,357億3,800万ドル（約145兆円）にまで拡大すると予測しているものもあります。

北海道は、6つの国立公園、世界自然遺産知床、世界ジオパーク2カ所（洞爺湖有珠山、アポイ岳）に代表される豊かで質の高い自然、その恵まれた環境が提供する多様なアクティビティ、アイヌ文化や^{おびた}夥しい数の縄文遺跡と、ATの旅行先となる全ての条件を充たしています。本稿では、AWのFAMトリップや商談会に参加したATTA会員や観光協会関係者の感想を紹介します。

ATの方向性が見えた



高田 茂 氏
(株)鶴雅リゾート取締役、
アドベンチャー事業部長

AWの中心イベントであるFAMトリップの企画、運営にも関わりましたので、気づいた点を紹介します。全行程を通し天候にも恵まれ、ATの中心をなすアクティビティの企画は概ね好評でした。特に、阿寒湖「光の森」や凍結した湖上でのファットバイク^{おび}*1体験、スノーシュー^{おび}*2やスキーシュー^{おび}*3によるリレーゲームは高く評価されました。後者はリレー形式で、湖上の小島などチェックポイントまで行き、クイズに答えたり、湖面に空けた複数の穴からロープをたらし最深部を当てる、さらに自分で氷に穴をあけてワカサギ釣りをするなど、複数の遊びを組み込んで順位を競うという内容です。湖の除雪も地元関係者が行い、手作り感溢れる個性的なプログラムだった点が評価されました。夕食時の表彰式も盛り上がりとても良い時間を提供できたと感じております。

また、私どものホテルが通常実施しているイベント、

*1 ファットバイク

幅の広いタイヤのマウンテンバイク。接地面積が広がり、雪・泥や砂などの悪路を走行できる。

モーニングカフェも喜ばれました。早朝日の出が一番よく見える湖上スポットまで行き、朝の澄み切った空気を吸いながら温かいコーヒーと阿寒湖の自然を楽しんでもらうという趣向です。一部の人が参加すると思いきや、全員参加で驚きました。アクティビティ中にお出ししたランチもベジタリアン対応もしっかり出来ていると、お褒めのお言葉をいただきました。イコロ（阿寒湖アイヌシアター）のアイヌ古式舞踊も、伝統的なアイヌ舞踊である点が評価されました。食も地元産にこだわった食材を中心に提供され、小樽での寿司握り体験も含め、参加者は大満足でした。

反省点としては、多くの参加者から、プログラムの内容は良いが時間が短すぎる、まる一日楽しめるようなものにしたいほうがよいという指摘がありました。また、私どものホテルでは全室Wi-Fi利用可ですが、Wi-Fiの電波が弱く、オン・タイムで情報発信ができなかったことが不便だったと言われ、この点は改善が必要と考えています。

商談会では、今回実施したようなプログラムを、自社（AW参加エージェント）が企画するツアーでも実施してもらえるのかと聞かれ、ATをどのように実現していくかについての具体的方向性が見えたような気がしています。

ATは北海道の未来のために重要



ピタ・大畑
(Peta Ohata) 氏
(株)トラベル北海道
代表取締役

昨年は私にとって記念すべき出来事が2つありました。1つは母になったこと、続いて旅行代理店(株)トラベル北海道を立ち上げたことです。一見無関係と思われるこの2つの出来事は、実は関連しています。私たちは北海道をこよなく愛し、この素晴らしい北海道を

*2 スノーシュー

かんじきに似た、雪の上を歩くためのはき物。

*3 スキーシュー

普通の防寒靴で手軽にはけるスキー。登りでも滑らず、下りは普通のスキーよりスピードが出ない。

両方とも雪の積もる野山をトレッキングするときに使用する。

世界に紹介したいと考えています。それは、息子が育っていく場所として北海道の未来は重要だからです。

私たちは元々アクティビティが好きなバックパッカーであり、札幌で4年以上ゲストハウスを運営してきました。また、私の専門分野が教育だったことから、総合的な野外学習を旅行パッケージに含めたいと思っていました。これに関して幸運だったのは、ATに出会ったことです。ATは激しいアクティビティだけでなくソフトな野外活動、地域独自の文化や自然体験など、幅広く本物を体験することも含んでおり、さらに旅行者が地域を訪れ、直接的利益をもたらすことによる地域振興をも目指しています。旅行資源を守るための環境保護、歴史文化の尊重と地域社会の利益を持続可能な旅行ビジネスとして統合しようとするATのコンセプトは私たちの目指すところとぴたりと一致し、私たちが作るツアーに最も適したモデルでした。また、この度ATTAのプログラムであるAWの一環として実施された商談会に参加しました。弊社のような小さな旅行社にとって、ATTAのネットワークは、学ぶ機会と効率よく商品を紹介する機会を提供してくれる点で非常に有益です。また、このようなイベントは、ビジネスだけではなく、志を同じくするバイヤーやメディアと実際に会うことができる点でも魅力的です。

北海道が年々観光客で賑わうなか、ATトラベラーは私たちが最も求めるべき人々だと思います。なぜなら自身が旅行するにあたっては本物を求める一方、自然への影響や価値ある資源を大切にすることに責任を持ち、人とのつながりを重視するという意識が高い人が多いからです。このことは取りも直さず北海道の恵まれた自然環境を活用、保護しながら地域振興を支援することになります。これが、私たちが北海道はATをなによりも優先して推進すべきだと考える理由です。

本格的なアドベンチャーへの高い関心に驚いた

今回、初めてAWの商談会に参加しました。参加を決めた理由は、実際に海外のバイヤーやメディアの方々と直接顔を合わせ、弊社が提供しているガイドサービスに対して、海外の方々が抱く興味やニーズを



宮下 岳夫 氏
(株)アルパインガイド ノマド
代表取締役

把握するためです。商談会に参加して予想外だったのは、お会いした方々の本格的なアドベンチャーへの関心の高さです。商談時にアイスクライミングや沢登り、ロッククライミングなどアドベンチャー的な要素の高い写真をご紹介した際、面談した方々の多くが興味を示されました。特に、何人もの方が、道内でも山容が峻険なため、最も難度が高いとされる日高山脈の写真に目をとめ、地図で位置を確認するなど具体的な情報を希望されたのには驚きました。全体として、日帰りハイキングのようなソフトなプログラムだけでなく、数日間山中で過ごすような本格的な登山やロック/アイスクライミングツアーを希望されたエージェントもあり、幅広いレベルのアクティビティのニーズがあると感じました。

一方、ATによる北海道のインバウンド振興に向けて、解決すべき課題は多々あることも痛感しました。例えば今回の商談会では、北海道の山岳分野はATのリソースとして可能性が非常に大きいと感じましたが、世界に向けた情報発信は充実しているとは言えません。

弊社は、北海道において山岳ガイドおよびアウトドアガイド事業を手がけるパイオニアとして、北海道のみならず日本全国、世界の山々でもその実績を重ねてまいりました。その経験に基づき、北海道という世界に誇れる大自然を四季を通じて探訪できる、また、幅広いジャンルの様々なレベルの方に対応した各種ツアーを、年間約400本ほど催行しています。今後は、海外の著名な山岳地帯にもひけをとらない、北海道の山々の素晴らしさを体験していただくと同時に、インバウンドのお客様向けに文化プログラムを組み入れる

など、お客様の嗜好^{しこう}に合わせてカスタマイズしたツアーの提供も積極的に進めていきたいと思っています。

世界でここだけ、というアクティビティを目指したい



板谷 貴文 氏
(株)オーシャンデイズ
代表取締役

(株)オーシャンデイズでは、2002年から国立公園「支笏湖」や北海道遺産「積丹半島」でダイビング等のアクティビティプログラムを提供しています。当社は、ダイビングを楽しんでいただくだけでなく、北海道のありのままの自然の魅力をお客様に伝えることを使命と考えています。私どものプログラムを通じて、海や山、湖などの自然を皆様に楽しんでいただくことが、ひいては北海道の自然を守ることにつながると思うのです。また、その美しく尊い自然を次の世代の子ども達へと受け継いでいくことを目指し活動しています。

現在、取り組んでいるアクティビティは、レイクダイビング、クリアカヤック^{*4}、スノーシュー、アイスウォーク^{*5}等です。目下、計画中のアクティビティも多々あります。日本初のみならず、世界でも類を見ない独特なアクティビティを企画中ですのでご期待ください。

AW商談会では、今回欧米各国から来られたバイヤーやメディアの方々にお会いし、お話ししたところ、思った以上に多くの外国人の方が、北海道について興味を持ってくださっている印象を受けました。私どもは、アクティビティを提供する会社ですが、現状の業界規模、内容では、海外、とくに欧米から来られたお客様の満足度、安全管理を確保可能な会社がどれほど存在するのだろうかと思いました。というのも、AW商談会では、欧米の方々はショートトリップよりもロングトリップ、ソフトなアクティビティよりもハード

なものの方に魅力を感じている様子で、その種の需要の大きさを実感したからです。

当社は主に支笏湖、積丹半島を拠点に活動しています。まずは、このような従来の体験観光よりもハードルの高いご要望にお応えできるよう、リスク管理を含めたガイドのレベルを上げながら北海道の広大な自然、ポテンシャルをお伝えし、実際に体感して満足していただけるよう日進月歩で成長していきたいと考えております。

世界水準のアドベンチャーガイドの必要性



小林 茂雄 氏
NPO法人南富良野まちづくり
観光協会 事務局理事

アウトドアガイドの仕事は、調理人の仕事と似ています。旬の食材（自然）を目利きし、適切な調理（体験指導）をし、時としてお客様の年齢、嗜好や天候に合わせ、お客様の満足により対価を得る。一流のアウトドアガイドとなるには、本人の経験、努力と年数が掛かります。ただし、同じ山や川を一日や半日、10年間ガイドしていれば一流となれるわけではありません。一流ガイドには、経験の質や知識の広さ深さが問われます。

一昨年より北海道にAT受け入れの機運が高まっています。遠く地球の裏側から、時間と金を掛けてやってくる欧米豪のアドベンチャー経験豊富なお客様が求めるのは、北海道の素晴らしい自然、文化と、有能なアドベンチャーガイドの存在です。ガイドに求められる資質は、山岳であれば、世界の山と登山の歴史を理解し、国内だけでなく海外の山へ遠征していること。自転車では、整備技術とともに本道の景観と道路を熟知し、お客様より強靱^{きょうじん}な脚をもっていること。野鳥観察では、広い自然知識を持ち、悪条件下でもお客様が

*4 クリアカヤック

船底が透明な素材でできたカヤック。水中が見える。

*5 アイスウォーク

ドライスーツを着て、凍結した湖上で遊ぶこと。

見たいと希望する鳥を探し出せる能力があることです。その上、英語でコミュニケーションを取れ、数日から10日程度ツアーに帯同できなくてはなりません。はたして北海道では現在、何人のアウトドアガイドが、世界が求めるアドベンチャーガイドと成り得るでしょうか。

その昔、「北海道観光、自然は一流、サービスは三流」「北海道の食、素材は一流、調理は三流」と言われていました。時代を経てサービスや調理技術は改善されましたが、今度は「北海道のAT、自然と文化は一流、ガイドは三流」と海外で揶揄されぬよう、ガイド育成に力を注ぐ必要があります。そのためには、官民挙げて「北海道の素晴らしい自然や文化を、世界に紹介するアドベンチャーガイド育成への投資」を行っていたきたい。

最後に、3月のAW商談会では、来訪されたメディア、ツアーオペレーターの方々は全て一流のアドベンチャートラベラーでした。ススキノでの二次会に分け入り本音を聞くと、夏期の日高山脈縦走や厳冬期の流水ウォークなど、本物のツアーに大いに興味を示していました。一流は本物を選ぶ、ごまかしのきかない世界を感じた夜でした。

まとめ

ATと従来の「体験観光」の最大の違いは主にアクティビティの内容にあります。もちろん「体験観光」で対応できる部分もありますが、ATの平均的なアクティビティは、「体験観光」に比べ、よりハードかつ多少なりともリスクを伴うものです。例えば、欧米圏で最も人気のあるアクティビティはハイキングですが、これは平地や低山の徒歩旅行を意味する日本語の「ハイキング」とは異なり、登山そのものを意味します。

一方、日本では愛好者人口800万人とも言われているにも関わらず「登山」はいわゆる「観光」には含まれてきませんでした。これは、登山は、日本の典型的な景観鑑賞、温泉、食を中心とする観光旅行とは相いれず、程度の軽重はあってもリスク管理が必要なことが影響していると思われます。このことは、登山同様

ATの主要なアクティビティであるサイクリングやカヌー、ラフティングのうち長距離や難コースを対象とするものにも当てはまります。AWで、ATTAのエージェントやメディアと直に接した本稿のAW参加者の感想からも、AT旅行者が好むアク

ティビティがどのようなものかはご推察いただけたと思います。

このように、ATを日本の観光に取り込むということは、既存の観光では対応できない内容を含めることになる点で、それ自体アドベンチャーと呼べるかもしれません。それでもなお、ATには、適切な情報を提供すれば、国外の巨大マーケットから今まで来日していなかった旅行者を呼び込めるという魅力があります。北海道は、登山についていえば、本州からのお客様にとってもアプローチが難しい、ヒグマが生息している等の理由からガイドが必要なため、国際水準の資格があり、英語も堪能な山岳ガイドの層が厚く、国内でも有数の登山専門の旅行社が存在するなど、万全とはいえないまでもAT旅行者を受け入れるための条件は既に揃っています。数年来、冬山登山並みのリスク管理が必要な、バックカントリースキーを楽しむためニセコを中心に訪れている欧米豪のお客様は、ATのスキー部門の旅行者といえるでしょう。ニセコに続き、北海道全体が日本におけるATのフロンティアとなることを期待してやみません。



早朝の阿寒湖でWOW！

参考文献

- 1) UNWTO（世界観光機構）2016年統計
- 2) Allied Market Research, "Adventure Tourism Market by Type, Activity, Type of Traveler, Age Group, and Sales Channel: Global Opportunity Analysis and Industry Forecast, 2017-2023"